

服部撫松編『京華春報』について

内 村 和 至

はじめに

私は先頃、明治七年（一八七四）に刊行された、服部撫松・高見沢茂・萩原乙彦、三人の「繁昌記物」についての論考を発表した。^①その作成作業の中で、撫松の雑誌としては最後のものとなった『京華春報』に注意を引かれた。撫松研究や明治初期雑誌研究の文脈からではない。時流から外れていくものに興味を引かれる私自身の性行によるものである。

明治期に簇生した雑誌は消長が激しく、何号まで出たかハッキリしないものがほとんどである。『京華春報』

もその例に漏れず、「廃刊未詳」となっている。^②また、それらの雑誌は安価で簡易な作りのため、まとまって保存されているものが少なく、各号が公共図書館や大学図書館に分散していて、容易に全体像を見通すことができない。現在、ウェブ検索によって知られる『京華春報』各号の所蔵先は、次のとおりである。

- ① 一一〇号 東京大学「明治新聞雑誌文庫」
- ② 一一九号 天理図書館
- ③ 一一七号 国立国会図書館
- ④ 三・六号 国文学研究資料館

私は取り合わせ本で一〇〇号を入手したので、一〇号を確認したところ、その「社告」に「次号ヨリ断然改良ヲ行フアラントス」(二二ウ)とあった。この「社告」と上記図書館の残存号数などを合わせ見ると、『京華春報』は一〇号で中絶し、「断然改良」の一〇号は存在しないのではないかと思われる。その刊行期間は、一〇号の明治三二年(一八八九)一〇月二十五日から一〇号の翌年一月二十五日までの三ヵ月間しかない。まずは典型的な「三号雑誌」である。

このような片々たる雑誌の文学史的意義などほとんど問題にならないだろうし、撫松の仕事の中でも強弩の末としてさほど重要視されていないには違いない。そのためか、『京華春報』について論じたものを見ないようである。私の個人的興味に発するものではあるが、ここに『京華春報』の書誌調査の結果と内容の概略について報告しておきたいと思う。撫松研究にいささかでも奇与できれば幸いである。

(1) 拙稿「明治七年刊の『繁昌記物』をめぐる——服部誠一・萩原乙彦・高見沢茂——(上)」、『文芸研究』第一三七号(二〇一九・二)、同(下)、『文芸研究』第一三

九号(二〇一九・九)。

(2) 塩田良三「服部撫松年譜」四二九頁(成島柳北/服部撫松/栗本鋤雲集「明治文学全集」第四卷 筑摩書房 一九六九・八)。

一 『京華春報』の位置付け

『京華春報』を撫松の仕事の中に位置付けるためには、まず撫松が関わった新聞や雑誌について確認しておくべきだろう。その大体を山敷和男の労作に拠りながら、書誌検索などで補足してまとめてみると次のようになるかと思う(「撫松関連新聞雑誌刊行年表」参照)。

撫松が明治七年(一八七四)刊の『東京新繁昌記』初編で大きな成功を収め、その勢いを駆って九春社を立てたのが明治九年(一九七六)、『東京新誌』(一一三三四号。明治九年四月一六日—同一年一月二七日)を刊行したのは、その四月のことである。『東京新誌』は、『東京新繁昌記』風の変体漢文や仮名交りの戯文、人情小説のほか、著名人の艶聞や政治諷刺などを盛り込んだ雑誌で、これも大きな成功を収めた。また、撫松は、この明治九年に『広益問答新聞』(一一三七六号。明治九年六

▽撫松関連新聞雑誌刊行年表

新聞名・雑誌名	出版社	明治9—23 (一八七六—一八九〇)													
◇広益問答新聞	四通社														9
◇中外広問新報	四通社														10
◇江湖新報	四通社														11
◇内外政党事情	四通社														12
◇東洋事情	四通社														13
◇東京新誌	九春社														14
◇春野草誌	九春社														15
◇吾妻新誌	九春社														16
◇京華春報	京春社														17

◇印 政治新聞・雑誌 ○印 文学雑誌

月一五日—一二年九月?日)を発行している(以下、創刊・廃刊日が確認できなかったものは「?日」と記す)。時代は自由民権運動をめぐる論議でかまびすしく、この新聞もめまぐるしく変転していった。

明治一二年九月に『広益問答新聞』が政府批判記事によって発禁処分となった後、『中外広問新報』(一一九五号。明治一二年一二月一八日—同一三年一〇月五日)に引き継がれるが、それがまた発禁となって、『江湖新報』

(一一一九八号。明治一三年一月一五日—同一五年八月一六日)に変身する。⁽³⁾このようにして、撫松は風俗誌『東京新繁昌記』から出発し、次第にその視線を社会や政治の現状に振り向けていった。また、撫松は明治一三年一二月に『東洋事情』(一一二〇号。明治一三年一月?日—一五年三月?日)も刊行している。これは海外情勢への関心を示すものと言えるだろう。このような撫松の政治への傾斜は、明治一五年の立憲

改進黨への入党に最もよく示されている。と言っても、撫松がどの程度、政党活動に関わったかは定かではない。確かに、明治一五年一〇月、『江湖新報』は、改進黨系の『内外政党事情』(一一三八号。明治一五年一〇月一八日—一六年二月二日)に衣替えしている。⁽⁵⁾これは短期間で廃刊となったが、撫松は『江湖新報』

を拡充して『内外政事情』を改進黨機關紙にしようと考えていたようである。しかし、撫松は社務を担当しただけで、紙面は改進黨の鷗渡会グループが仕切っていた。刊行から廢刊に至る経緯は、春城市島謙吉の『内外政事情廢刊ノ顛末』が伝えている。市島は撫松を策士的出版業者と見なしていたようで、その筆致には軽侮感が感じられる。そもそも撫松と市島は世代も教養基盤も異なっていた。撫松は市島の一九歳年上であり、市島の父の二歳下に過ぎなかった。つまり、親子ほどの世代差があったのである。市島にとって撫松は既に時代遅れにしか見えなかったであろう。

それはともあれ、明治一四、五年の撫松は新展開を模索していたように思われる。明治一四年三月には、『東京新誌』の姉妹誌『春野草誌』(一一三三号。明治一四年三月一五日―同一年六月九日)を発行している。また、明治一五年二月には、紙商人丸谷新八に『江湖新報』『東洋事情』の事業を委任し、一月には『内外政事情』の会計をも委任した。撫松の多忙と経済的な理由が原因だったのだろうが、これが後に丸谷との係争を引き起こす元となったらしい。

そうこうしている内に、明治一六年一月二七日付『東

京新誌』第三三四号が、井上馨令嬢と馬丁の關係を当てこすった記事を掲載し、これによって刊行停止に追い込まれた。撫松は間を置かず『吾妻新誌』(一一一四〇号。明治一六年四月二三日―同一年四月?日)を刊行する。『吾妻新誌』は第十六号(明治一六年五月一八日)から、刊記に「持主 丸谷新八」の名を載せるようになっていく。このあたりから丸谷は自ら積極的に経営に乗り出そうとしたようである。それが基で撫松は利益配分をめぐって丸谷と悶着になり、『吾妻新誌』から離れることになった。野崎左文は、

その翌々年(明治一七年)のことであるが丸春社から発行して居た『吾妻新誌』の主筆服部撫松翁が持主たる数寄屋橋紙問屋○一事丸谷新八と利益分配の事から衝突し、袂を払って撫松翁は退社した……

と伝えている。最終的に『吾妻新誌』が廢刊になったのは、創刊から三年後の明治一九年四月のことである。その後、丸谷とのトラブルは裁判にまで発展し、示談が成立したのは、ほぼ一〇年後、明治一九年六月のことであった。

話を元に戻すと、『吾妻新誌』退社後、撫松は雑誌や新聞の運営に懲りたのか、このころから単行書の刊行に力を入れ、明治一九年五月には改正増補版『東京新繁昌記』二篇五冊を、六月には訳述書『世界進出第二十二世紀』⁹を、一〇月には『二十三年国会未来記』を刊行している。

明治二〇年二月には『文学小説連理談』上篇、同月に服部誠一先生序／吸霞仙史著『内地雑居街適嗜』を出している。吸霞楼は撫松の居宅の号だったので、この「吸霞仙史」は撫松本人と考えられている。また、同年五月には『教育小説稚児桜』、翌明治二十一年の三月に『文明花園春告鳥』上、四月に『二十世紀新亜細亜』、五月に『文明花園春告鳥』下と続けて著作を出している。このような撫松の著作と雑誌の内的関連は全く説明されていない領域であり、今後の研究課題であろう。

このように、撫松は『吾妻新誌』廃刊後、しばらく雑誌から離れていたが、廃刊から三年後の明治二十二年一〇月に、京春社を設立して刊行したのが、『京華春報』（一一一〇号。明治二十二年一〇月二五日―同二十三年二月二五日）である。しかし、『京華春報』はわずか一〇号で頓挫した。ありようは、撫松の雑誌には既に需要がなくなっていたということであろう。その後の撫松は、時折著作を

ものしつつ、明治二九年三月、宮城県尋常中学校教員となって仙台に赴任し、晩年まで国漢教師として過ごし、明治四一年八月一日に亡くなるまで、操觚界に再び立ち戻ることはなかったのである。

撫松の出発点は世相を戯漢文で皮肉った『東京新繁昌記』にある。その批判精神が自由民権運動に湧く時代状況の中で政治化していったのが、『広益問答新聞』を初めとする政治新聞だったと言えるだろう。その政治批判の背景には、撫松が明治維新によって敗者となった奥州二本松藩の儒者だったことが伏在しているはずである。

私は撫松の政治観を巨細に検討してはいないが、儒者を出自とする撫松が近代的な政治観を有していたとは思えない。撫松の政治批判は、基本的に儒学的治世観のジャーナリスティックな変形だったように感じられる。その意味で、撫松の変体戯漢文の文体も寺門静軒に倣ったというよりも、そもそも同様の精神基盤から発していたと言うべきではないだろうか。ただし、静軒のとげとげしい苛立ちは撫松にはない。撫松の戯虐は筆鋒が鋭いというよりも、むしろ鈍重な無神経から生まれたものだったように思われる。

その撫松のスタイルは、『東京新繁昌記』から『東京

新誌』に引き継がれた。『春野草誌』『吾妻新誌』は、『東京新誌』のバリエーションであり、雑誌の基本的立場に変化があったわけではない。それが丸谷との係争などの中断を経て、撫松は『京華春報』によって再起を期したのであろう。その意味で、『京華春報』は撫松雑誌の掉尾を飾る、もしくは、強弩の末の雑誌だったのである。

(1) 撫松伝としては、①三木愛花「服部撫松伝」(『早稲田文学』大正一五年四月号)が、同時代人による基本資料である。年譜は塩田良三の手になるものが広く知られているが(はじめに)注(2)前掲)、現在では、①山敷和男『論考服部撫松』(現代思潮社一九八六・五)所載の年譜に拠るべきだろう。また、②山敷和男校注『第二世／夢想兵衛胡蝶物語』(現代思潮社一九八五・五)の解題も有益である。しかし、これも三〇年以前のものであり、撫松研究は停滞したままである。山敷が撫松の評伝を完成させなかったことが惜しまれる。

(2) 『明治初期文学雑誌集成』(ナタ書房一九九三)以下下の三誌がマイクロフィルムで収められている。①『東京新誌』第一―三三四号、②『吾妻新誌』第一―一〇号、③『春野草誌』第一―三〇号。ただし、これらには欠冊もあるほか、現存の最終号まで収められているわけ

ではない。

(3) 『江湖新報』には、参本社版『江湖新報』(一一二九号。明治九年一月二九日)という同名紙が存在していた。撫松はその名称を拝借したわけである。

(4) 『東洋事情』は未調査だが、これは稀観雑誌に属するらしい。東京大学付属図書館「明治新聞雑誌文庫」に第七・八、一五―二〇号が蔵されているが、ウェブ検索による限り、私はそれ以外の伝存を知るを得なかった。

(5) 『内外政事情』の研究としては、大日方純夫『自由民権運動と立憲改進黨』(早稲田大学出版一九九一・一)がある。

(6) 早稲田大学図書館蔵自筆本(全文デジタルデータ公開)。

(7) 『春野草誌』の端本(一一六、二四―三三三号)を架蔵するが、三三三号は柱刻が一一八丁「三十四号」、九一一五丁「三十五号」となっている奇妙なものである。

(8) 野崎左文『私が見た明治文壇』(春陽堂一九二七・五)所収「服部撫松翁の評判」三―四頁。

(9) 三木愛花(注(1)①前掲)や野崎左文(注(8)前掲)が伝えているように、撫松は外国語を解さず、この書は名義貸しに過ぎなかった。訳述・校閲などを謳った撫松の著作の全体像はほとんど解明されていない。

二 『京華春報』書誌と内容の一斑

『京華春報』架蔵本は取り合わせ本のため、一―一〇号各冊の保存状態がそれぞれ異なり、また、五冊が重複している。なお、八号は広告・刊記一丁分が欠丁している。以下の書誌は、重複分については保存状態のよい冊を記載する。

底本 架蔵本。

冊数 全一五冊（一号・三号・六号が二冊、二号が三冊重複）。

書型 一九・〇糎×一三・〇糎。

表紙 柳・梅・水仙の意匠の飾り枠。発行年月日・外題・号数・社名が記され、社名の下に、陽刻角印「京春／社印」が押されている（参考図版1）。号によって表紙用紙の色目や模様がやや異なっている。これが紙質の違いなのか日焼け・退色によるものかどうか判断しにくい。

外題 「京華春報」

内題 一号冒頭「京華春報第壹號」（参考図版2）。以

下、同様体裁。

用紙 各号とも表紙見返しは本文とは別の黄色の用紙。末尾の広告・刊記も同様の黄色用紙を用いている。

綴糸 緑色の糸による簡略な大和綴じ（参考図版1）。構成 各号とも、本文は、①時事門、②雑説門、③花街門、④柳巷門、⑤詩歌門、⑥小説門、以上の

六部門から構成されている。丁数は各号によって異なるが、二二丁を基準としていたものと思われる。

一号―表紙一丁・本文二〇丁・広告一丁。

二号―表紙一丁・本文二二丁・広告半丁・刊記

半丁。

三号―表紙一丁・本文二四丁・広告一丁半・刊

記半丁。

四号―表紙一丁・本文二二丁・広告一丁半・刊

記半丁。

五号―表紙一丁・本文二二丁・広告一丁半・刊

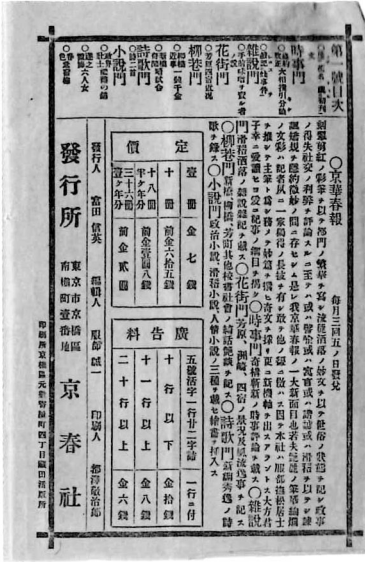
記半丁。

六号―表紙一丁・本文二三丁・広告半丁・刊記

半丁。



参考図版 1:『京華春報』第 1 号表紙



参考図版 2:『京華春報』第 1 号表紙見返し

発行 各冊表紙に発行年月が記されている(参考図版 1)。第二号表紙見返しに「毎月三回五之日発兌」とあるとおり、一号「明治廿二年十月廿五日発兌」。以下、十一月五日・十五日・廿五日、十二月五日・十五日・廿五日、明治廿三年一月五日・十五日・廿五日。

刊記 第一号のみ表紙見返しに「発行人 富田信英／編輯人 服部誠一／印刷人 都澤敬治郎」、「発行所 東京市京橋区／南横町一番地 京春社」とある(参考図版 2)。第二号以下は、裏表紙に同様の記載がある。「富田信英」は未詳。「都

七号―表紙一丁・本文二二丁・広告半丁・刊記半丁。
 八号―表紙一丁・本文二二丁・以下欠丁。
 九号―表紙一丁・本文二二丁・広告半丁・刊記半丁。
 一〇号―表紙一丁・本文二二丁・広告一丁半・刊記半丁。

匡郭 子持ち枠 一四・四糎×一〇・二糎。
 柱刻 体裁は各号同様なので、第一号のみ示す。
 「京華春報」第一號――(一七)。

澤敬治郎」は二冊の著書が知られている。^①

定価

第一号表紙見返しに、定価と広告料の表がある

(参考図版2)。「定価／壹冊 金七錢／十冊前

金六拾五錢／十八冊半ヶ年分 前金壹圓八錢

三十六冊壹ヶ年分 前金貳圓。「広告料／五号

活字廿二字詰 一行二付／十行以下 金拾錢／

十一行以上 金八錢／二十行以上 金六錢」。

同様記事は各号裏表紙に記載され、第二号以下

には付記として「○府外ハ一冊二付郵便税金五

厘ヲ要ス○郵便為替ハ東京芝区芝口郵便支局へ

御振込被下度候」とあり、号によっては、この

後に「○代価郵券ニテ御送付ノ分ハ一割増之事

○見本ハ郵券七錢五厘ニテ呈スヘシ」の文言が

加わっている。

『京華春報』の書誌は概略、如上のとおりである。全

一〇号の内容目次は別掲『京華春報』目次一覽」を参

照されたい。『京華春報』編集方針は、第一号表紙見返

し記事(参考図版2)に記載され、この文章は各号の表紙

見返しに再録されている(句読点を付して引用する)。

○京華春報 毎月三回五ノ日発売

刻翠剪紅ノ彩筆ヲ以テ都門ノ繁華ヲ写シ、流麗洒落

ノ妙文ヲ以テ世俗ノ状態ヲ記シ、政事ノ得失社交ノ

利弊ヲ評論スルニ至テハ、或ハ譬喩或ハ寓言或ハ諧

謔或ハ滑稽ヲ以テシ、諫言矯規ヲ隱約微妙ノ間ニ存

セシム。是レ我京華春報ノ一大新面目也。若夫艶麗

ノ筆華絢爛ノ文彩ハ記者夙ニ一家独特ノ長技ヲ有シ、

敢テ他ノ輦ニ倣ハス。因テ本社ハ服部撫松居士ヲ推

シテ主筆ト為シ、務メテ妙篇ヲ撰ヒ奇文ヲ採リ更ニ

新機軸ヲ出スアラントス。大方君子幸ニ愛読セヨ。

爰ニ記事ノ細目ヲ掲グ。○時事門 奇構斬新ノ時事

評論ヲ載ス ○雑説門 滑稽洒落ノ雜說雜記ヲ載ス

○花街門 芳原、洲崎、四宿ノ景況及風流逸事ヲ記

ス ○柳巷門 新橋、柳橋、芳町他校書社会ノ綺話

艶談ヲ記ス ○詩歌門 新調秀逸ノ詩歌ヲ録ス ○

小説門 政治小説、滑稽小説、人情小説ノ三種ヲ載

セ絵画ヲ挿入ス

要するに、彩筆・妙文を以て都下の繁華や世俗を活写

し、あるいは、政治・社交の得失を評論し、譬喩・寓言・

諧謔・滑稽の裏に社会改良の意図を籠めるというのであ

る。また、本誌は、①時事門、②雑説門、③花街門、④柳巷門、⑤詩歌門、⑥小説門の六部門からなることを明言している。各号のそれぞれについて巨細に論じることのできないので、ここでは、創刊第一号を例にとり、各部門の内容を概略的に眺めてみたい（以下、漢文の題名は書き下して引用する）。

冒頭は創刊の辞として「花名ヲ集メテ初刊ヲ祝スル文」が掲げられている。地名・花名を吹き寄せにした文章で、語彙豊富な修飾的なもので、実質的な内容はほとんどない。①時事門は「条約改正／大相撲引分論」と「戯レニ蛙事件ヲ記ス」の二編。前者は「条約改正」をめぐる論議を相撲に譬え、行司を入れて引き分けにせよとの論じたもの。後者は、具体的にはどういふ出来事に基づいたものかわからないが、蛙同士の議論によって吉原を諷している。②雑説門は「手前味噌ヲ売ル者ノ説」は、政党を寓した「雷同屋」と「海蜃屋」の角突き合いを手前味噌の売り合いと揶揄した文章である。③花街門の「二廊三宿近況」は、芳原と須崎の二廊と品川・新宿・千住の三宿の近況を報じたもの。④柳巷門は「柳橋近事／一装千金」と「新橋奇聞／暗試合」の二編で、柳橋と新橋の芸妓についての雑報である。なお、撫松が花柳界

を「校書社会」、芸妓を「校書」と称するのは『唐才子伝』に由来する。このようなひねった漢語に卑語をマゼコゼにするのが撫松の文体であった。三木愛花の伝えるところによれば、撫松は花街柳巷に自ら出入りはせず、探訪記者らの情報によって記事を書いていたと言う。その生真面目さと度々卑猥に渡る粗野な文章との落差が、撫松の撫松たる所以だったと言えるだろう。

⑤詩歌門は遊鶴仙史「寄遠詞」と眠花瘦士「芳原竹枝」の二編。「寄遠詞」は、歌妓が遠隔の恋人を慕う心情を詠じたもので、「竹枝」は漢詩人が好んだ文人趣味の遊里詩。作者の遊鶴仙史と眠花瘦士は未詳である。撫松本人かもしれない。⑥小説門は、退思軒稿「政界壯士／襤褸の錦」第一齣、仏国パリジャンヌ雑誌／日本遠思楼主人抄訳「迷の懺悔／六人女」上編、柳塙散史稿「春色／鶯宿梅」の三編からなる。このうち、『政界壯士／襤褸の錦』と『春色／鶯宿梅』の二編は一〇号まで連載されているが、「六人女」は一―三号で完結している。

「六人女」は抄訳とあるようにフランスの雑誌から抜粋したものだろう。原典は未詳だが、いずれ仏語に通じた人物が関わっているには違いない。作者・訳者の退思軒、遠思楼主人、柳塙散史は誰とも知れない。撫松の変名の

可能性もあるのかもしれない。なお、小説は六号にのみ香夢楼主人眠花瘦人の「賤廻しじょうのおとこ絞卷せまきま涙廻なみどろり縁言えんご」並引一が掲載されている。作者の眠花瘦人は一号の「芳原竹枝」作者、眠花瘦士と同一人と思われるが、これも未詳の作者である。

『京華春報』第一号の内容はおおよそ、以上のようなものである。『京華春報』の特長は、撫松のこれまでの雑誌と比較して検討されるべきだろうから、次節には、その関連について瞥見しておくたい。

(1) 都澤敬治郎は『京華春報』廃刊後、明治法曹界の大立者磯部四郎と関係がきたらしく、小冊子『從五位磯部四郎君伝』(発行奥野網城 印刷北陸公論社 明治三二年六月 国会図書館デジタルコレクション〈<http://ndl.go.jp/infondjip/pid/780986>〉)を編集しており、また、磯部四郎述『憲法講義』(青木嵩山堂 明治三九年六月国会図書館デジタルコレクション〈<http://ndl.go.jp/infondjip/pid/788933>〉)には「門人 都澤敬治郎 筆記」と名を載せている。

(2) 成都の楽妓、薛濤(せつとう)は、蜀に使いた元徴之に文才を賞され「校書郎」に任せられたため、蜀人は妓を「校書」と呼ぶようになったという(『唐才子伝』巻六「薛濤」)。

(3) 三木愛花「服部撫松伝」(第一節注(1)①前掲)。

三 撫松雑誌の性格

撫松が『京華春報』に至るまでに創刊した雑誌の刊行経緯は第一節に確認したので、ここではそれらの内容を簡単に検討してみたい。個々の雑誌を網羅的に論じることは不可能なので、便法として、それぞれの第一号の内容目次を比較してみることとする(以下、架蔵本による)。

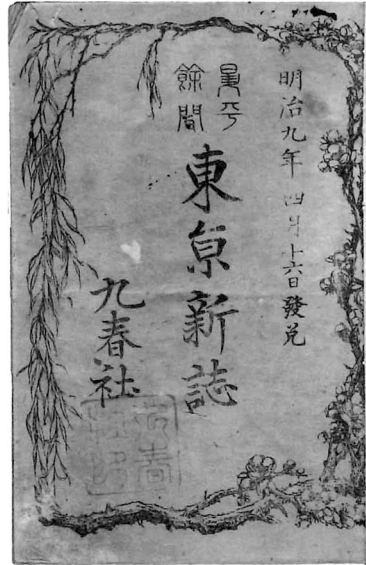
明治九年(一九七六)四月一六日創刊の『東京新誌』は明治一六年一月二七日発行の三三四号まで七年に渡って刊行された。撫松の雑誌の中では最も長く続いたものである。分量は一冊が一四、五丁内外で、一頁は一行二五文字一行で構成されている。『東京新誌』第一号(参考図版3)は次の六項目から成る(便宜的に番号を付す)。

① 近藤芳樹「上野花見の記」(一オ―四オ)―和文

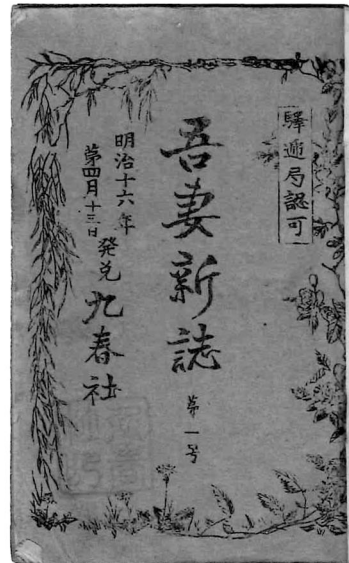
② 南橋仙史石井富「観梅散記」(四オ―六オ)―



参考図版 4:『春野草誌』第1号表紙



参考図版 3:『東京新誌』第1号表紙



参考図版 5:『吾妻新誌』第1号表紙

漢文

- ③ 服部誠一「三絃二重税ヲ課スルハ淫風ヲ去ルノ良策タルノ論」(六オ―一ウ)―漢文訓 読体
 - ④ 石塚友松「礫園異覽」(一一ウ―一三ウ)―漢文訓読体
 - ⑤ 其角堂主人永機「其角堂併説」(一三ウ―一四ウ)―和文
 - ⑥ 大久保春驪「寄書」(二四ウ―二五ウ)―和文。目次には記載がない。
- ①の近藤芳樹(一八〇―一八八〇)は本居大平に学

んだ国学者で、維新後は宮内庁文学御用係を務めた。当時の国文学界の重鎮と言っている。②の南橋仙史石井富については野崎左文に一文がある。①それによれば、南橋は文人肌の趣味人で、狂詩や竹枝の名手として知られ、撫松が退社した後の『吾妻新誌』に顧問格として参加した人物である。

撫松の③「三絃二重税ヲ課スルハ淫風ヲ去ルノ良策タルノ論」は、撫松の自説と言うべく、『京華春報』第六号でも同様の説をなしている。④「礫園異覧」の筆者石塚友松は未詳。⑤「其角堂俳説」の其角堂主人永機（一八三三—一九〇四）は、六世其角堂鼠肝の長男で、七世其角堂を襲名した。正岡子規以前の所謂「月次俳諧」時代の大立者である。⑥大久保春驪の「寄書」は創刊の祝辞で、大久保春驪の経歴は未詳だが、松村春輔（生没未詳）『春雨文庫』校閲者としてのみ名が知られている。

『東京新誌』第一号の書き手はこのようなものだが、これは『東京新誌』の編集方針が幅広く投稿で誌面を構成しようとしていたことと関連しているのである。

『東京新誌』第四号（五月一三日刊）の社告の一条には、

○本誌ハ新奇ノ各文ヲ集録スルノ旨趣ナレハ江湖ノ

諸君幸ニ玉篇ヲ投寄アランコトヲ仰望ス（一四オ）

とあって、「新奇ノ各文ヲ集録スルノ旨趣」から広く投稿を求めるという編集方針が語られている。なお、同社告の次条には、

○本誌ハ一月三号ノ発兌ナリカ幸ニ諸彦光願ヲ賜ヒ
シニ由リ本月ヨリ毎土曜日ニ発兌ス依テ尚一層ノ眷
顧アランコトヲ懇希ス（一四オ）

とあり、この四号から週刊とすることが告知されている（後にまた旬刊に戻っている）。それだけ『東京新誌』の出だしは好調だったようである。実際に、『東京新誌』第一号は再版されるほど売れたらしい。

この好評に乗って、撫松は明治一四年三月に姉妹誌『春野草誌』をも発行した。野崎左文は「九春社の印刷機に余裕ができた処から、居士（撫松）は更に『春野草誌』といふ姉妹雑誌を発行し……」と言っている。この雑誌は『東京新誌』より文芸誌的で、そのため、撫松の得意とする社会風刺や揶揄は影を潜めている。その一号の目次は、次のようになっている。

① 競春世界―漢文

② 源氏ノ卷名ヲ集メテ自ラ発兌ヲ祝スル文―漢文
訓読体

③ 春野草誌二題ス―漢文訓読体

④ 春の色―和文

⑤ 春游感有リ謹テ光顧諸君ニ告ゲ―漢文訓読体

⑥ 三絃之靈ヲ戒ム―漢文訓読体

⑦ 朝野豹変漫評―漢文

⑧ 阿諛之功用―漢文

⑨ 聘娼十則―漢文

⑩ 祝詞―漢文

⑪ 春色梅の花笠題辭―和文

創刊号で他の執筆者を準備する余裕がなかったものか、全ての記事は無署名である。おそらく撫松が全部を書いたのであろう。その後、何人かの執筆者を迎えたにしても、撫松の多忙が緩和されたわけでもなかっただろう。撫松が驚異的な速筆だったことは三木愛花や市島春城が伝えているが、それにしても、『東京新誌』と『春野草誌』に、漢文・漢文訓読体・和文・漢詩など様々な文体で記事を書くのは目が回る忙しさだったに違いない。明

治一五年中に丸谷新八に『江湖新報』『東洋事情』『内外政党事情』などの経営面を委託したのも当然だったろう。一方、矢継ぎ早に書かれる文章がマンネリ化していくのも避けられなかった。撫松の文章は詞藻豊富で流暢だが、練られた文章ではないだけに結局は同工異曲であって、その内容は変化や発展性に乏しい憾みがある。つまりは千篇一律なのである。

このように撫松が多忙を極める中、明治一六年一月二七日発行の『東京新誌』第三三四号は、井上馨令嬢と馬丁の関係を当てこすった「恋路活劇／熱海道行」によって刊行停止に追い込まれた。しかし、撫松はさほど間を置かず『吾妻新誌』（一一一四〇号。明治一六年四月一三日―同一九年四月）を刊行し始める。

『東京新誌』の後を継いだ『吾妻新誌』一号の目次は、次のようなものである。

① 撫松「吾妻錦絵兼テ発刊ヲ祝ス」―漢文

② 撫松「初音之鼓」―漢文

③ 梅南子「春告げ鳥」（五〇―六ウ）―和文

④ 撫松「美人共楽会」（六ウ―七ウ）―漢文

⑤ 三木愛花「芳原植桜記」（七ウ―八ウ）―漢文

⑥ 愛柳情史稿「連理縁」第一回（八ウー九ウ）――

漢文

⑦ 吸香情癡「本事詩話」其一（九ウー一〇ウ）――

漢文

⑧ 情史氏「越柏新誌二題ス」（一〇ウ）――七律

⑨ 無署名「吾妻狂言 開帳 演説」――漢文

⑩ 無署名「花廼露恋廼濡路」第一章（一一オー一二ウ）――和文

この目次からも察せられるように、『東京新誌』に代わる『吾妻新誌』に大きな路線変更はなかった。『東京新誌』の刊行停止は外部的事情によるものだったため、時好に投じていた編集方針を変える必要はなかったからだろう。ただ、『東京新誌』と異なるのは、『吾妻新誌』の経営に丸谷新八が加わったことである。それは、撫松の多忙のみならず金策の必要からだったろうが、後に丸谷との関係がこじれて、撫松は『吾妻新誌』を退くことになった。その意味で、『吾妻新誌』は撫松に陰りが差し始めた雑誌だったと言えるだろう。

『東京新誌』『春野草誌』『吾妻新誌』の第一号だけを比較して言うのはいささか暴論に過ぎるが、こう見てく

ると、撫松の雑誌は発行された時期に違いがあるだけで、その大枠はほとんど変わっていないと言ってよい。撫松最後の雑誌となった『京華春報』も、その点ではこれら三誌と同工異曲だった。いささか異なるのは、『京華春報』の誌面は、時事門・雑説門・花街門・柳巷門・詩歌門・小説門の六部門から構成されていることである。この六部門を明示した誌面構成が、『京華春報』のわずかばかりの新機軸だったが、それは誌面にある種の統一感をもたらすと同時に、取材範囲の固定化をも意味していたように思われる。つまり、これらの六部門は撫松雑誌の基本的な構成要素を端的に抽出したものであったと見てよいだろう。撫松の雑誌は、明治九年の『東京新誌』から同十二年『京華春報』まで、その間一三年を閲しているが、その内容はこれら六部門の枠内において、ほとんど変化発展を見せなかったとも言える。

因みに、『京華春報』刊行の数年後の明治二五年には『文学界』が創刊されている。明治初頭という激変の時代に、一〇年一日の如き雑誌が世間からずれていくのも無理はなかった。勝海舟の「十年人心一変の説」ではないが、流行り物は廃れるのも早い。つまり、撫松自身は何ら変らなかったが、世間がどんどん変わっていったの

である。その意味において、撫松は近代雑誌メディアの興隆と衰退を体現した最初の文筆家¹⁾ジャーナリストだったと言えるのではないだろうか。

- (1) 野崎左文「石井南橋散史の一面」(第一節注(8)前掲書)三〇〇―三一〇頁。
- (2) 明治三一年(一八九八)の段階でも、『都新聞』が行った「俳諧十傑投票」で、永機は三万四千票の一位、正岡子規は千票の三七位であった(今泉洵之介『子規は何を葬ったのか』新潮選書 二〇一・八)。
- (3) 早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」の検索による。
- (4) 高知市民図書館・近森文庫蔵『東京新誌』第一号表紙に「再板」とある(国文学研究資料館「近代書誌・近代画像データベース」<http://school.nijiac.jp/kindai/CKMR/CKMRT-00035.html#2>)。
- (5) 野崎左文「服部撫松居士の評判」(注(1)前掲書)三一四頁。
- (6) 三木愛花「服部撫松伝」(第一節注(1)①前掲)は、撫松の速筆ぶりをミシンに譬えており、市島春城「撫松思軒桜痴露伴諸家」(『春城筆語』早稲田大学出版部一九二八・八)も、「……服部の原稿を書くのを常に見てゐた。如何にも達者なものであった。漢文には無論上り点をつけたが、書き／＼上り点をつけてゆく。それが

迅速で如何にも慣れたものであった」と言っている(一三八頁)。

- (7) 海舟は、「ワシはもと西洋人の言つた七年一変の説ネ。アレを信じているのだ。どうも七、八年ないし十年にして人心が一変するよ。……水野の時は、外国のために準備すると言つて、八釜しいことであつた。阿部の時には、水戸が勤王攘夷とか言つて、騒々しかった。西郷らが王政復古をしたそのつど、あとから見ると、先の事が馬鹿らしく見える程に、勢いが変わつてしまふ」と言っている(勝部貞長編『新訂海舟座談』岩波文庫 一九八九・三)。幕末明治初期は、特にその「勢い」の激変期であつた。

おわりに

私は秋原乙彦研究の文脈から、その著『東京開化繁昌誌』を調査し始め、高見沢茂の同名書『東京開化繁昌誌』に行き当たり、「繁昌記物」の先蹤となつた撫松の『東京新繁昌記』に行き着いた¹⁾。その意味で、私はマイナー「繁昌記物」から辿り返して撫松に至つたのであるが、撫松は文学史において必ず触れられるものの、研究そのものはさほど進んでいないように印象される。

撫松が『東京新繁昌記』初編によって一躍世の流行児となったのは、明治七年（一八七四）の四月である。天保一二年（一八四一）生まれの撫松は、そのとき三三歳であった。奥州二本松藩の儒者だった撫松は、その経歴や年齢からしても、既に人格形成は完了していた。また、世にもてはやされても、撫松の生活は浮薄には流れなかった。三木愛花は、撫松を「氏の風采人格は全く其筆と反対であって儒家に生れた士族と云ふ典型を備へたものであった」と評しているが、撫松は生涯を通じて、この儒者^②士族のエートスを保ったままだったのである。市島春城は、後年、撫松の文章と人となりについて、

……服部の文は艶麗で頻りに綺語を弄した。成島柳北のに較べると文品は下つたけれども、それが却つて俗に投じた。随分思ひ切つて淫褻の事を書いたものであつた。……アンナ綺語を弄する撫松其人は意気なしやれた人で、もあるかのやうに人は想像するであらうが、顔には痘痕があり、辯舌は東北訛りのツウ／＼で、文章と打つて変つた人であつた。

と評している^③。撫松は単に儒者^①士族意識を基盤として

ただけではない。むしろ、撫松の撫松たる所以は、この「東北訛りのツウ／＼」にあつたと私は思う。つまり、撫松は都会的洗練とは全く無縁の人物、即ち、傍若無人の田舎漢^{どらま}だったのである。猥雑を厭わぬ戯文も、露悪趣味というよりも、田舎人らしい無骨さ無神経さに由来するものだったように思われる。また、そこには東京という文化の中心地に対する撫松の東北人的反骨心も働いていたに違いない。その精神構造に、文化における「中心と周辺」構造を見て取ることも可能だろう。即ち、東北^①周辺からする東京^②中心への抑揄・批評である。撫松の批評性と滑稽味は、このトリックスターの性格にあつたように思われる。その意味で、撫松の生み出した変態漢文も、漢文体の正格^③中心に対して周辺をなす文体だったと言えるだろう。

その撫松の文体感覚については、後年の教え子である吉野作造が伝えるエピソードが示唆的である^④。

其頃（明治二九年（一八九六）三月）の服部先生は漢文崩しでなければ文章でないといふのであつた。

こそだのけれどと書くとき直ぐ朱線で消される。六かしい字を並べると九十點は間違ない。……一體に

詞藻の豊富な人と見えて、例へば先生春風駘蕩といふやうなことを外にまた何とか云ひ様はありませんかなど、いふと、直ぐ得意になつて黒板へ二十三十位の熟字を書き示さるゝを常とした。之には生徒一同煙に捲かれて仕舞つたものである。

先に引いた市島春城も「服部の文は艶麗で頻りに綺語を弄した」と評していたように、撫松の文体と速筆は、この語彙力の異常な豊富さに支えられていた。しかし、それは、辞書的知識の豊富さであっても、表現力の問題とは直結しない。言葉の微妙な陰影という点については、むしろ撫松は鈍重と言うべきだが、それは撫松の文章が語彙の物量と速度に依拠していたからだったのではないだろうか。また、その物量と速度という性格は、明治維新という時代の性格でもあったように思われる。

時代の流れに棹さした撫松も、流行り物は廃れる習い、十数年で凋落していった。かくして撫松は、文学史もしくは文化史から姿を没していったのである。もちろん、雑誌メディアの草創期に撫松の果たした役割は評価されていないわけではない。それにしても、掲載作品や文章が後世に残る形ではなかったために、実際よりも過小評価

されている傾きがあるように思われる。またそれは、単に漢文雑誌が流行らなくなったという時勢のためばかりではないだろう。撫松は、そのトリックスターの性格ゆえに、後続者を持たなかった、あるいは、持てなかったのである。それが、文学史上において、撫松が孤立現象にとどまり、冷遇され続けてきた所以でもあるだろう。そこに幕末明治の文学史的断層があると言つてもあながち間違ではないように思う。明治初期のメディア史に一瞬の光芒を放った撫松は、その史的意義を再評価されるべきもののように思われてならない。

(1) 三木愛花「服部撫松伝」(第一節注(1)①前掲)四〇頁。

(2) 市島春城(第三節注(6)前掲)一三八頁。

(3) 吉野作造「服部誠一翁の追憶」(『閑談の閑談』書物展望社 一九三三・六)二五七頁。

▽『京華春報』目次一覽

同年11月5日		明治22年10月25日		号	門
二号		一号		目次	丁
⑤	秋闈怨 金石生*	①	京華春秋*	集ニテ花名ヲ祝スル初刊ヲ文	一〇―二ウ
④	神田怪聞ノ臆病芸妓*	②	政治政界の色男	条約改正ノ大相撲引分論*	二ウ―五ウ
③	葭街春信ノ三鶯争シ梅*	③	雲行きの説	戯レニ記ス蛙事件ヲ*	五ウ―七ウ
②	冷谷巧言ノ関西児(承前)*	④	放学士牛馬居士ノ伝*	手前味噌ヲ売ル者ノ説	七ウ―九ウ
①	噴飯新話 可笑齋 撰訥子*	⑤	米權告ノ宿六ニ文*	二廓三宿近況*	九ウ―一〇ウ
		⑥	政界壯士ノ鑑樓ノ錦 退思軒稿 第一齣 壯士困窮屈ヲ学ヒ蝸牛ヲノ政友慷慨 漫ニ吹シ法螺ヲ	柳橋近事ノ一装千金*	一一ウ―一二ウ
			春色ノ鶯宿梅 柳鳩散史稿 第一回 病妓情郎を思ふて愁苦を説く	新橋奇聞ノ暗試合*	一二ウ―一三ウ
			壯士新論*	寄遠詞 遊鶴仙史*	一三ウ
			政治政界の色男	芳原竹枝 眠花瘦士*	一三ウ―一五ウ
			雲行きの説	政界壯士ノ鑑樓ノ錦 退思軒稿 第一齣 壯士困窮屈ヲ学ヒ蝸牛ヲノ政友慷慨 漫ニ吹シ法螺ヲ	一五ウ―一七ウ
			放学士牛馬居士ノ伝*	迷の懺悔ノ六人女 仏国パリジャンヌ雜誌ノ日本遠思楼主人抄訳 上編 半開の早梅ノ妙媚の妖桃	一七ウ―二二ウ
			米權告ノ宿六ニ文*		一〇―一ウ
			噴飯新話 可笑齋 撰訥子*		一ウ―四ウ
			冷谷巧言ノ関西児(承前)*		四ウ―七ウ
			葭街春信ノ三鶯争シ梅*		七ウ―八ウ
			神田怪聞ノ臆病芸妓*		八ウ―一〇ウ
			秋闈怨 金石生*		一〇ウ―一一ウ
					一一ウ―一二ウ
					一二ウ―一四ウ
					一四ウ―一五ウ
					一五ウ―一五ウ

四号		同年 11月 15日				三号			
②	①	⑥	⑤	④	③	②	①	⑥	
美人慈善会 承前*	鍍金淑女ノ説* 新法律を読んで色深い政事家に告ぐ	政界壮士ノ襤褸の錦 退思軒稿 第二齣 滑舌喋喃漫ニ鼓シ客氣ヲノ憤鬼 闖入忽チ暗ニ踪跡ヲ 春色ノ鶯宿梅 退思軒稿 第三回 春風に吹かれて双蝶花に眠らんとす 糰子坂ニ観テ菊ヲ有レリ感*	減字木欄花 秋夜 駕梁居士* 京華春報の発刊を祝して 花廻屋胡蝶 柳巷門を見て 同	下谷奇談ノ妖猫被レ抜ケ爪ヲ* 烏森近事ノ演説先生折シ舌鋒ヲ*	洲崎新廓 大八幡楼*	游蕩俱樂部 爆裂彈ノ説*	京華春秋* 軽石主義は政海に浮る勿れ	芳原竹枝 南柯情仙* 寄ニ校書小一ニ 同*	一五ウ 一五ウ 一六オ―一七ウ 一七ウ―一九ウ 一九ウ―二二ウ 一オ―二オ 二オ―五オ 五ウ―七オ 七オ―九ウ 九ウ―一一ウ 一一ウ―一四ウ 一四ウ―一五ウ 一五ウ―一六ウ 一六ウ 一六ウ 一七オ
六ウ―七ウ 七ウ―八ウ	一オ―三オ 三オ―六ウ	一七オ―二二オ 二一オ―二三ウ	一六ウ 一六ウ 一六ウ	一四ウ―一五ウ 一五ウ―一六ウ	一一ウ―一四ウ	五ウ―七オ 七オ―九ウ 九ウ―一一ウ	一オ―二オ 二オ―五オ	一六オ―一七ウ 一七ウ―一九ウ 一九ウ―二二ウ	

同年 12月 5日				五号	同年 11月 25日			
⑤	④	③	②	①	⑥	⑤	④	③
奇 _レ 某 _レ 妓 _一 夢花生* 新聞詞 小香情史* 書 _レ 懷 _テ 南柯小史* 失題 香蘭小史*	湯島近談 _ノ 妖猫出 _{ニテ} 奇兵 _ヲ 利 _ニ 爪頭 _ヲ * 芳原紅髯楼 附阿茶漬*	噴飯新話* 宿六答 _ニ 米櫃 _ニ 書 夢中生*	大鷲神社 _ノ 熊手の霊 條約改正之縮尻*	都下流行 _ノ 幽鬼会社* 禁酒新論 上篇 春色 _ノ 鶯宿梅 柳塙散史稿 第四回 新聞巷説を伝へて風波を揚ぐ	代 _レ 妓 _ニ 酬 _ニ 人 _ニ 花月情仙* 政界壯士 _ノ 襪樓の錦 退思軒稿 第三齣 權妻被 _レ 欺口 _ニ 鳴 _シ 不平 _ヲ 山師侍 _レ 空腹 _ニ 築 _シ 樓閣 _ヲ 迷の懺悔 _ノ 六人女 仏国バリジャンヌ雜誌 _ノ 日本遠思樓主人抄録 下篇 盆上の女郎花 庭前の秋 海棠	芳原竹枝 南柯情仙* 情史活談 _ノ 群猫争 _レ 餅 _ヲ	洲崎新廓 大松葉楼*	戲 _レ 捕 _ニ 游廓馬 _ヲ 以 _テ 記 _ス * 京華春報の発行を祝す 桜梅園主人 投 噴飯新話 蝸牛生*
一五オ	一四ウー一五オ	一二オー一三ウ	一〇ウー一一ウ	七オー八オ	一五ウー一八ウ 一八ウー二〇オ 二〇オー二二ウ	一五オ 一五オー一五ウ	一三オー一五オ	一一ウー一二ウ
一五オ	一四ウー一五オ	一二オー一三ウ	一〇ウー一一ウ	七オー八オ	一五ウー一八ウ 一八ウー二〇オ 二〇オー二二ウ	一五オ 一五オー一五ウ	一三オー一五オ	一一ウー一二ウ

同年12月25日					同年12月15日					六号		
七号					七号					六号		
⑤	④	③	②	①	⑥	⑤	④	③	②	①	⑥	
寄雛妓某兒 香梅楼醒客*	舟江竹枝 南柯情仙* 芳原雜詞 香郷醉逸*	山手一斑 / 半月妓*	新橋情譜 粹夢楼主人 半狂居士記*	北里回房奇談*	戯レ記ニ拔毛賠償ノ事ヲ*	社会大煤掃	府県会ハ非ニ腐権会ニ*	廢娼新論 上篇	政界壯士 / 鑑樓の錦 第三齣の続き 退思軒稿 春色 / 鶯宿梅 柳鳩散史稿 第五回の続き 第六回 愁雲散じて歡意又春を催ふす	政界壯士 / 鑑樓の錦 第五回 船宿の二階に情郎怒りを漏らす 裸体美人* 各宗競争 / 政党巡礼*	噴飯新話 咄々子 / 棒腹齋 / 平氣散人* 芳原小楼一斑 附薄命兒千歳伝* 赤阪奇談 / 発砲芸妓* 下谷昏痴戯談* 竹枝 花月情仙*	讀テ京華春報ヲ有感。因テ取テ京華春報ノ四字ヲ為シ韻ト賦シテ狂詩四首ヲ以テ寄ス 骨皮道人 政界壯士 / 鑑樓の錦 退思軒稿 第四齣 夢ニ拾テ黄金ヲ想ニ像シ王家ヲ / 心ニ写シテ国会ヲ自ニ負シ紳士ヲ 賤廻紵卷淚廻繰言 並引 香夢楼主人 眠花瘦人
一五ウ	一五ウ 一五ウ 一五ウ	一四ウ 一五ウ	一三ウ 一四ウ	一二ウ 一三ウ	一七ウ 二〇ウ 二〇ウ 二〇ウ 二〇ウ	一四ウ 一四ウ	一三ウ 一四ウ	一一ウ 一二ウ	一〇ウ 一一ウ	九ウ 一〇ウ	一五ウ 二〇ウ 二〇ウ	

同年 1月15日				明治 23年 1月 5日				八号																
④	③	②	①	⑥	⑤	④	③	②	①	⑥														
柳橋彙報／艶冶条例*	新橋春報／妓界辛苦*	品川新話／春衣之裾*	噴飯新話	浮世の初夢 前号の続き 夢想子	決闘子／伝*	天麩羅政事家*	廃娼新論 下篇完	政界壮士／襪樓の錦 第四齣の続き 退思軒稿	春色／鶯宿梅 柳塙散史稿 第八回 淑女実を告げて良人の危急を救はんとす	二十三年間之活劇*	読春報* 第六号統編 骨皮道人	芳原雜詞* 前号統編 香郷醉逸	無題* (無名)	三父一母／夜食血塊*	芳原新年／飾衾奇談*	恵方参り節*	浮世の初夢 夢想子	廢娼新論 中篇	新年百感*	京華春秋*	臆病芸妓に題して (無名)	政界壮士／襪樓の錦 第四齣の続き 退思軒稿	春色／鶯宿梅 柳塙散史稿 第五回 船宿の二階に情郎怒りを漏らす	京華春報の発刊を祝して 伊藤春圃
一五ウー一六オ	一五オー一五ウ	一三オー一四ウ	一二ウ	九ウー一二ウ	八オー九ウ	三オー三ウ	四オー八オ	一七オー二〇オ	二〇オー二二ウ	一オー三オ	一七オ	一六ウ	一六ウー一七オ	一四ウー一五ウ	一五ウー一六オ	一三ウー一四ウ	一〇ウー一三ウ	七ウー一〇ウ	四オー七ウ	一オー四オ	一六オー一九ウ	一九ウー二二ウ	一五ウ	

※①―⑥①時事門・②雜説門・③花街門・④柳巷門・⑤詩歌門・⑥小説門
 ※*印=漢文

同年 1 月 25 日						二〇号
⑤	芳原元旦所見 生醉居士* 芳原雜詞 南柯情仙* 寄 _二 某妓 _一 錦劉郎	一六オ 一六オ 一六ウ	⑥	政界壯士／縹樓の錦 退思軒稿 第五齣の続き 春色／鶯宿梅 柳鳩散史稿 第十回 佞人船宿の二階に密事を話す	一六ウ―二〇オ 二〇オ―二二オ 二二オ―二二ウ	
④	下谷奇聞／猫兒被 _二 老狸 _一 誑 _{カサ} * 群芳又新譜第二 三升屋 _二 小喬 _一 *	一四ウ―一五オ 一五オ―一五ウ	③	暴富秘訣／当世の金儲け 芳原艶話／踏台情郎* 政熱余焰／紅粉政党*	九ウ―一二オ 一二オ―一三ウ 一三ウ―一四ウ	
③	美人之力*	八ウ―九ウ	②	読京華春報 有無洋子* 吉原竹枝 鸚鵡山人* 妓樓深夜 天外居士*	一六オ 一六オ 一六オ	
②	五色紳士	四ウ―八オ	①	新立三国未來戦記*	一オ―四ウ	
①	社告					